Osaka University Knowledge Archive

Title	「執心」への対処をめぐる物語 ： 『新可笑記』巻四の一「舟路の難義」考
Author(s)	仲, 沙織
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 113-126
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70913
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「執心」への対処をめぐる物語

―『新可笑記』巻四の一「舟路の難義」考―

仲　沙　織

はじめに

『新可笑記』（元禄元年〈一六八八〉十一月刊）中の一章、巻四の一「舟路の難義」の内容は次の通りである。

摂州伊丹の代官は有能で正直な人物であったが、神崎の遊里通いを止められず、嫉妬する妻と連れ立ってまで遊女と会っていた。ある日遊里への渡し船に乗った際、臨月であることを隠していた妻は船上で娘を出産し、死亡してしまう。

成長した娘は祝言前に乳母から母親の死の真相を知らされて狂乱し、父親は心労から死に至る。婚約者が娘を引き取って看病し、「物ごとにくふうふかき人」の知恵によって梓神子による母親の口寄せが行われる。しかし、母親の言葉は娘を厳しく叱責するものであったため、娘は母親を恨んで正気に戻り、祝言を行って家は繁盛した。

『新可笑記』は西鶴の浮世草子作品において評価が低く、さらに巻四の一については、金井寅之助氏によって次の指摘がなされている。(1)

それ〴〵二つの話である。一つの話では感興なきため組み合せて筋の面白さを作らうとしたもの、しかも情趣もなく、内容も面白くなく失敗に終つてゐる。（中略）これも中国種の話であるが、娘の発狂を神子を使つて癒すのが主要説話で、悋気深い妻の話を組み合せ、更に章首に『新可笑記』らしくするために、郷方の武士の心得の種々を加へたのである。話に統一がなく、文章また粗雑、甚だ読みづらいものである。（中略）話の内容は興趣もなく意義も乏しい。

（以下、引用の傍線は稿者による）

金井氏は、出来が「最下等に属する」章段の一例として巻四の一を挙げている。確かに、代官と妻の遊里通いを描く前半部と娘の狂乱を描く後半部とは、一見分裂しているように見える。

また、巻四の一は、前半部と後半部のみならず、徴税と武士の

心得について言及する冒頭部と物語全体との分裂が指摘されてきた章段である。杉本好伸氏は冒頭部を「主人公から話題が離れていくように読者をして感じさせ」、「読者のスムーズな理解を妨げていく」ものとし、「たとえ叙述の内容が作者の是非とも述べておきたいものであったとしても、滑らかなストーリーの流れという点から言えば、それらは難点以外の何ものでもないと言えるだろう」と捉えている。[2] 一方、この「難点」とされる冒頭部に対し、重要性を見出したのが篠原進氏である。

たとえば、巻四の一「舟路の難義」。これについても仲氏が口頭発表をしているが、[3] 仲氏が触れなかった前半部分は専ら代官という職の難しさについての厳しい指摘が記されている。年貢徴収の最前線にあり、誘惑が多く危険な職種。庄屋や年寄は農民に負担させた賄賂で代官を動かそうとする。だが、武士は俸禄以外のものを求めるべきではないし、農民は「手つからつくれる八木は其国主にささけ、其食物は雑穀にして渡世する事なれは、憐みをかくべき」であると。日常的にありそうな、代官の汚職。それを詳述しながらも西鶴は「此代官諸事に其難ひとつもなく」とあぶない指摘を巧妙に回収し、何ごともなかったかのように、嫉妬深い妻を神崎の遊郭に同行した代官とその娘の話をはじめるのである。主筋を逸脱した、右の「あぶない」部分は、当然のごとく梗概から省かれることになる。[4]（注は稿者による）

篠原氏はまた、巻四の一について「凡庸な一話であるが、真に読むべきは本話の冒頭部分にある」とし、冒頭部から〈毒〉、すなわち武家体制への批判精神を読み取る。[5]

このように、先行研究では物語の主筋よりも冒頭部分が問題とされてきた。では、巻四の一は篠原氏が示唆するように冒頭部が最も重要であり、それ以降は蛇足に過ぎないのか。稿者は、同じ章段に組み込まれた以上、冒頭部が本筋とは無関係に執筆されたものだとは考えていない。この点については後述する。

巻四の一を通観してみると、遊里通いを止められない代官、妻の船上での出産と死、娘の狂乱――一見して異常な事態が連続していることが分かる。仮に巻四の一において、作者が最も述べたかった内容が冒頭部における体制への批判ならば、その後にこのような事態を連ねて描く必要はあるのだろうか。

巻四の一の冒頭部以降については、これまで充分な読解がなされているとは言いがたい。よって、冒頭部以降に登場する人物の言動、そしてそれによって生じる事態の因果関係について、詳細に分析する必要があるだろう。本稿ではこのような視点から、巻四の一の章段全体としての読解を試みる。

一　代官と妻の人物造形（1）――代官の「油断」

まずは、巻四の一において最初に登場する代官と、その妻の人物造形について考察を行いたい。まず、代官の特徴を考える上で重要となるのは、巻四の一冒頭部である。冒頭部がどのように展開されるのか、改めて確認してみよう。冒頭部は、役人の「私よ

く」、庄屋の「不届」、小百姓の「我まま」という徴税をめぐる各階層の人間の欲望とそれによる問題を示し、「物にはよいかげんといふ考有べし」「定免の取かた用捨有へし」と徴税の難しさを説く。その後、論の対象は武士個人へと移り、浪費によって家の経営が困難になると述べる。

冒頭部は論じる対象が転々としており、統一性が無いように見える。しかし、話題は連想と飛躍を繰り返しながらも、様々な階層の人間が持つ金銭や土地、贅沢品への欲―端的に言ってしまえば物欲の有様とその制御の難しさが描かれているのである。このような展開を持つ冒頭部の始めと終わりに、代官の政務能力について言及されていることが注目される。

古代、摂津国伊丹の城主につかへて、郷方の支配して、何がしとて勘定に発明なる人ありける。殿にも御ためよく、百姓にもいたまざる納めかた、世中はかく有たき物ぞかし。

（中略）此代官、諸事に其難ひとつもなく、正直をもつて大役をおさめられしが、美女のもてあそびやむ事なく、すゑはこれにて身のはつべきはじめなり。

代官は「殿にも御ためよく、百姓にもいたまざる納めかた」ができる人物である。中略した部分には前述した世間一般の役人や庄屋、百姓による徴税や武家個人の浪費をめぐる諸問題が述べられているが、代官は「諸事に其難ひとつもなく」政務を行っていた。代官はそれらの問題に対処できる、つまり他者や自身の物欲を上手く制御する能力を持つ人物であったがゆえに、高い政務能力を持っていたのである。

しかし、そのような代官であっても、唯一「美女のもてあそび」という欲求だけは抑えることができなかった。代官の遊里通いについては、次のように描写されている。

夜毎に此人かよはれしを、妻なる人ふかくそねみ、夫に身をはなれず、うらみをなせば、「遊女はかりなる者にして、夢に酒くみ、現に歌舞を聞のみ。更に誠はなくて、気を晴す間のたはぶれ。そなたもいざ」といさめて、それよりは、夫婦ひとつの川舟に竿ささせて、行ては帰るあだ波の、身は浮草の花にたとへ。咲てしほるるかぎりと、蛍を石火の明かたに見なし、名残の座敷も妻女一所に別れ、かりにも枕は見さりき。是程執心ふかき女は、世に女も有に、すくれての因果なり。

代官は神崎の遊里へと「夜毎に」通って遊女遊びに興じていた。代官の妻は深く嫉妬し、夫から離れずに「うらみをな」す。そのような妻への対処として、代官が共に遊里へ行くように提案すると、妻は渡し船はおろか遊女の居る座敷にまで付き従うという、「執心」深さを見せた。妻女を同伴して遊里に向かう例は未見であるものの、夫婦が共に同じ舟に乗るという要素は、謡曲「高砂」を想起させる。ただし、夫婦相愛の「高砂」とは異なり、妻はともかく代官は妻への関心が薄いと言わざるを得ない。次に引用する場面には、船上で妻が出産し、その直後に死亡した際の代官の言動が描かれている。

此男の身にして一しほかなしく、「あたる月ならば、何とて語り給はざりしぞ。常にかはりて大事の身なれば、其家を出べき事にあらず。恥ならぬ事をふかく秘し給ひて、かかる難義を見る事ぞ」と、とやかくなけくうちに、其時節来て平産して、娘のはつ声せはしく、是はかたよせ、其母気しきりに眠るがごとく、世をはやうなりぬ。是非なき仕合、沙汰せず屋かたに帰り、宿にてかくなりゆく首尾にもてなし、かなしき無常を見しに、此子は命有て、なをまた歎き弥増なり。

代官は妻の死に歎きながらも、その死の現場を遊里へ向かう船上ではなく、自分の屋敷とする工作を行っている。この代官の行動は醜聞を避けて家の名誉を守ろうとしたものと考えられ、冒頭部で示された代官の処理能力の高さが示されるものの、「正直をもつて大役をおさめられし」とされる代官の「正直」が私生活では発揮されていないことが注目される。

さらに、代官による発言の内容に注目してみたい。代官は妻の死を「かなしく」思いながらも「あたる月ならば、何とて語り給はりしぞ」と、妻の行動を責める発言をする。無論、妻が代官に懐妊を告げなかったのは、「大事の身なれば、其家を出べき事にあらず」と屋敷に留め置かれることを予想したからであろう。執心深い妻は、代官が自分の目を離れ、一人で遊里へ向かうことを許容できなかった。すなわち、妻の船上での出産と死を招いた根本的な原因は代官の遊興にあるのだが、代官の発言には自身の行動に対する後悔がなされていない。また、代官は妻が臨月であるにもかかわらず、外見からそれを見て取ることが出来なかった。「遊興にこのみ入」った代官は、妻への注意が疎かになっていたのである。

ここで、巻四の一の章題に注目してみたい。「舟路の難義」とは本文中に「かかる難義を見る事ぞ」という代官の発言にあるように、妻の船上での出産と死を示している。では、副題の「武士は心の海に油断せぬ事」は何を意味するのだろうか。「心の海」とは、「舟」との関連から、心の広さを海にたとえた語[6]である。「武士」が代官を指すならば、「心の海に油断」をするとは、代官が妻の抱える執心の実態を理解することが出来ず、共に遊里へ通うという提案を大人しく呑んだ妻の表面上の寛容さに「油断」したことを意味する。その結果、妻の臨月にも気づかず遊里通いを続け、妻が死に至るという取り返しの付かない失敗を犯してしまう。

代官は政務や家の経営という公的な場面では注意深さを発揮する人物である一方、妻の扱いというごく私的な場面では油断をして失敗しまう人物として描かれているのである[7]。

二　代官と妻の人物造形（2）
―「かりなる者」への志向と「執心」

では、妻の死を招いてしまった代官の遊里通いとは、どのような性格を持つものであったのだろうか。冒頭部において、代官は「美女のもてあそび」に熱中するも、政務に優れ「大役」を務め

る能力を持った人物であった。他の西鶴作の武家物にも女性に耽溺する武士が登場するが、その行状は代官とは大きく異なっている。

『武道伝来記』（貞享四年〈一六八七〉四月刊）

巻四の二「誰捨子の仕合」

心の海を横わたしに、むかし嶋原の舟つきに、辻岡角弥とて、浦の吟味役人して有しが、御奉公疎略して、明暮奢りを極め、京より美女を取よせ、其上他国よりの縁組をかたく御法度を背き、泉州堺の、手前よろしき町人の娘をよびむかへ、さまさま我ままかさなりしを、

『武道伝来記』巻七の一「我が命の早使」

月はかはらぬ昔の空、日に向ふ国の守につかへし、磯辺頼母とて、勇に色ふかく、春秋の花紅葉、紅閨長時に、いまた妻女はさだめず、幾人か翫び、酒婚日日に長じて、勤めも自からに欠ぬ。

右に挙げた武士達は、色欲に溺れて「御奉公疎略」「勤めも自からに欠ぬ」という状態に陥っている。また、『武家義理物語』（貞享五年〈一六八八〉四月刊）巻六の三「後にそしるる恋の闇打」では、武士と女色について次のように述べられている。

日ごろは武道の男なれども、女にはよはき心ざしをみられ、いづれ智愚のわかちもなく、色道にまどはぬはなかりき。

『武家義理物語』では、「武道」を備えた男でも色欲に溺れれば「智愚のわかち」も無くなってしまうとされている。しかし、巻四の一の代官は、夜ごと遊里に通うにもかかわらず、「諸事に其難ひとつもな」いという職務の有能さを保っているのである。この代官の特異性を考える上で注目すべきは、代官が遊女について妻に語った内容である。

妻なる人ふかくそねみ、夫に身をはなれず、うらみをなせば、「遊女はかりなる者にして、夢に酒くみ、現に歌舞を聞のみ。更に誠はなくて、気を晴す間のたはぶれ。そなたもいざ」といさめて、それよりは、夫婦ひとつの川舟に竿ささせて、

代官は遊女が「かりなる者」であり「誠」がないことを認識している。また、「夢に酒くみ、現に歌舞を聞のみ」と自身で述べ、実際に妻と同伴して遊女に会った際も「名残の座敷も妻女一所に別れ、かりにも枕は見さりき」とあることから、代官は遊女と肉体関係を持つことを重視していないことがわかる。さらに巻四の一後半部、代官が娘の狂乱に「気をこらし」て死亡した後、「此家絶て、自然とその名のすたる事、遊興にこのみ入、武士のわたくしありし故なり」と評されていることからも、代官の関心は女色ではなく、遊里での「遊興」そのものに向けられていることがわかる。

代官が妻を同伴した遊里の様子が描かれた後、「是程執心ふかき女は、世に女も有に、すくれての因果なり」と妻の代官に対する「執心」深さを強調する評が述べられているが、ここでは逆説的にそのような「執心」深い妻を連れてまで遊里へ向かおうとす

る、代官の持つ「遊興」への異常な執着をも浮き彫りにされている。代官の「遊興」とは、遊女という「かりなる者」を相手に「夢に酒くみ、現に歌舞を聞」く「気を晴す間のたはぶれ」である。これは現実からの逃避行為に他ならない。代官は「遊興」という非現実を求めるあまり、妻という現実に対して「油断」し注意を怠った。その結果が「舟路の難義」であり、娘の狂乱と自身の死を招いた。一方、妻は夫である代官に深く執心し、我が身を省みず追い続ける人物である。二人は常に行動こそ共にするが、お互いの欲求は決してかみ合うことがない。まさに「すくれての因果」で結ばれた夫婦であった。

後半部では、この夫婦から生まれた娘の成長後の様子が描かれる。娘は母親が病死ではなく出産後に死んだという真実を明かされ、「母の事ざんじもいひやまず」に「狂乱」してしまう。母親は出産直後に死亡したため、娘は母親の記憶を全く持っていないはずである。しかし、母親が自身を産んだために死んだという現実を受け入れられない娘は、「見ぬよの母」という虚像を追い求めて狂気に奔った。非現実への志向と相手への異常なまでに深い執心―後半部に登場する娘は、前半部で描かれる父親と母親、両者の特徴を受け継いだ存在なのである。

三　「養生の才智」による娘の治療

この娘の狂乱は、「物事にくふうふかき人」の智恵によって治療されることとなる。まずは、この「物ごとにくふうふかき人」が具体的にどのような行動をとったのか、確認してみたい。

此後祈祷さまざまなれ共、母にしうたん日日につのり、をのをのあぐみて、内談とりとりの折ふし、物ごとにくふうふかき人のいへり。「此病性医術にはかなはし。某がし存ずるむねあり」とて、①かの息女にいてあひ、其みだれたる心に我もみたれけるに、おのつから此人のいへる言ばを聞入し時、「それ程母のなつかしくは、難波の大寺の神子を呼よせて、冥途の事共口よせて聞給へ」といへは、大かたならずよろこび、「有がたきをしへぞ」と、是をねがひける時に、②神子をまねき、乱人の様子を内証にていひふくめ、梓にかけて呼出す。（中略）此時娘、母を恨み心になり、其のたましゐ入かはり、正気になりて、此事おはり、其後常にかはらねば、

「物ごとにくふうふかき人」が行った治療と思われる行為は、狂人と同じように振舞って対話可能にする（傍線部①）、神子につれない母親を演じさせて狂人の心を正気にさせる（傍線部②）ことの二点である。前者については類例を見出せなかったが、巻四の一でより重要な役割を果たすのは後者である。ちなみに、稿者は梓神子に「内証にていひふくめ」て母親の演技の内容を指示した人物は「物ごとにくふうふかき人」であると捉えている。商売として口寄せを演ずる梓神子が、自らの判断で顧客の期待を裏切り、「座中興をさま」すような演技をするとは考え難いからだ。

巻四の一は「かかるためし、もろこしにも長明子が養生の才智に見えたり」という末尾の一文で締めくくられる。「長明子が養

生の才智」は、「物ごとにくふうふかき人」が行った娘の治療を示すと考えられる。この「長明子」については諸注が不詳としており、結論を先に言えば稿者もその典拠を発見することができなかった。しかし、巻四の一の内容や当時の狂乱の治療法から、その内容を推測することが可能であると思われる。

まず、当時の医学書における狂乱の治療法は、灸や瀉血などの物理的な療法や薬学的な記事が多くを占め、現在のカウンセリングなどのような精神療法の例は殆ど見出せない。ただし、巻四の一の「養生の才智」の参考となるものとして、当時広く受容された医学書である虞摶『医学正伝』の例が挙げられる。本書の巻五「癲狂癇証」の項には、次の治療法が掲載されている。[8]

丹渓活套に云く、五志の火、七情に因りて起り、鬱しめて痰を成す。故に癲癇狂妄の証を為すを、宜しく人事を以て之を制すべし。薬石の能く療する所に非ざるなり。須らく其の由を診療するを以て之を平らぐべし。

怒りて肝を傷むる者は、狂を為し、癇を為す。憂を以てこれに勝たしめ、恐を以て之を解せしむ。喜びて心を傷むる者は、顛を為し、癇を為す。恐を以て之に勝たしめ、怒を以て之を解せしむ。憂ひて肺を傷むる者は、癇を為し、顛を為す。喜を以て之に勝たしめ、怒を以て之を解せしむ。思ひて脾を傷むる者は、癇を為し、顛を為し、狂を為す。怒を以て之に勝たしめ、喜を以て之を解せしむ。恐て腎を傷むる者は、顛を為し、癇を為す。思を以て之に勝たしめ、憂を以て之を解せしむ。驚きて胆を傷むる者は、顛を為す。憂を以て之に勝たしめ、恐を以て之を解せしむ。悲しみて心胞を傷むる者は、顛を為す。恐を以て之に勝たしめ、怒を以て之を解せしむ。[9]

此の法、惟だ賢者、之を能くするのみ。

右は患者の感情を変化させることで精神の治療を行う方法であり、巻四の一の娘が母親を慕う心から「母を恨み心になり、其のたましゐ入かは」ったことで狂乱から快復した点と共通する。また、「薬石」では治せず、「賢者」にしか出来ない療法であったという点は、「物ごとにくふうふかき人」の「此病性医術にはかなはし」という発言との関連が注目される。さらに、類似する療法が中江藤樹『為人鈔』（寛文二年〈一六六二〉五月刊）巻之八「第一、人而無二医術一忠孝之道不レ能二行尽一弁」にも見られる。

サレバ、或女、胸ニ気アガリテ、猛々トシテ、久シク煩フ。諸医、手ヲ尽シテモ、其験ナシ。ココニ、サル医者ノ云。此女人ノ病ハ、恋慕ノ思ヒアリ。心ヲ佗ニ配シタル人ナリ、ト、云。此女、是ヲ聞テ、以ノ外怒リ。努々、左様ノ心ナシ。イカナレバ、此医師。我ニ、アラヌ難ヲ云ルソ、トテ。俄ニ、黒雲ノサシオコルゴトクニ怒リテ後。右ノ病人、薬ヲノマズシテ平癒ス。医者ノ一言ニテ、胸ノ鬱ヲ奪ヒ取ル計ナリ。[10]

どのような治療を行っても治らない「胸ノ鬱」を患った女性に対し、ある医者がその原因を恋煩いと診断する。全く心当たりのない言葉に激しい怒りを感じた女性は、その後薬を飲まずに平癒

してしまった。『為人鈔』の例は狂乱の治療法ではないが、患者に対して言葉を用いて感情を大きく変化させ、一瞬にして快方に導くという点が巻四の一と共通する。推論の域を出ないことが残念であるが、おそらく「長明子が養生の才智」もこれらの例のように、患者の感情を変化させる治療法であったと考えられる。

では、実際に巻四の一において、娘の狂気の治療はどのように行われたのか。次に、梓神子による口寄せとその内容を引用する。

神子をまねき、乱人の様子を内証にていひふくめ、梓にかけて呼出す。見ぬよの母にあふ心ちして、袖は涙に耳をすませば、此神子、わめき出しわめき出し、「実や人の子の習ひにて、親の恩愛思ふには、夫の心にしたがひ、不断は世を大事に思ひ、命日には精進、香花つみて吊ふべきを、朝暮なげく涙の熱湯の玉ふりて、身にかかりての苦み。たまたま仏果を得て、九品の蓮台に座してうき世を忘れしに、汝なげきてさはりとなり、今よりは、子にあらず親にてなし。人間生死は一たびはのがれず。愚なる心ざし、浅ましいかな」と、たたみかけての立腹、座中も興をさましぬ。此時娘、母を恨み心になり、其のたましゐ入かはり、正気になりて、此事おはり、

梓神子が演じた母親の態度は、娘を労ることなく一方的に長々と説教をした上で、娘の思慕を「愚なる心ざし、浅ましいかな」と言い捨てて「立腹」し、絶縁を言い渡すものであった。母親からの言葉を受けた娘は、「此時娘、母を恨み心になり、其のたましゐ入かはり、正気になりて、此事おはり、其後常にかはらねば」と、狂乱から完全に快復する。狂気に陥っていた娘は「見ぬよの母」という虚像を追い求めていたが、梓神子の演じた母親はその理想像を打ち砕いたのである。また、母親の説教は「親の恩愛思ふには、夫の心にしたがひ、不断は世を大事に思ひ、命日には精進、香花つみて吊ふべき」「人間生死は一たびはのがれず」と、現実を見るよう諭すという特徴があった。梓神子の口寄せは、母親の虚像を求めて狂気に陥った娘に厳しい現実をぶつけることで、娘を正気―現実の世界へと連れ戻したのである。

その後の展開については、「其後常にかはらねば、祝義を取いそぎ、いよいよ此家繁昌となれり」と、娘と婿の結婚と家の繁栄を描いて終わっている。これは単なる拙速な締めくくりではなく、「見ぬよの母」との虚像の親子関係を追い求めていた娘が、婿と結ばれ「此家繁昌」と子孫に恵まれる、つまり現実の親子関係を築くことが出来たことを示した結末なのである。

四　「執心」を扱う先行文学作品の利用と転化

以上、本稿では巻四の一の登場人物の言動についての分析を行ってきた。続いては、巻四の一において執心に深く関連する複数の先行文学作品の利用がなされていることを指摘したい。まず注目されるのは、前半部の代官の遊里通いについて、次の舞台設定がなされていることである。

其比神崎の里に遊君を集め、中町の長者といへるは、高倉

院の御時、斎藤滝口に相馴し横笛が母なり。此女は、大かた無双の能者なれば、建礼門院のはした者に召あげられ、世に情の深き事、盛衰記にみへたり。此ゆかりにて、今も遊女の波枕、

神崎については、すでに広嶋進氏により「伊丹の城主荒木村重は、信長に攻められ、有岡城（伊丹城）に籠城するが、妻子や臣下を見捨てて、尼崎城へ逃げた（信長公記十二など）。逃亡手段は猪名川の船であったと推定される。本章で代官が、妻と共に伊丹から神崎へと船で通う行為は、右の村重の行動と対照的な設定を意図したものであろう。[11]」との指摘がなされている。しかし、神崎の遊里は本文中において「今も遊女の波枕」とされているが、実際に興盛を誇ったのは院政期であり、近世期には廃れている。[12]巻四の一の時代設定は「古代」とあり、その時期は具体的に明示されてはいないものの、不自然さは否めない。しかし、この箇所で注目すべきは、神崎の紹介に「盛衰記にみへたり」とあるように、『源平盛衰記』巻三十九の参照が行われていることである。[13]傍線部の「斉藤滝口に相馴し横笛」の詳細について、『源平盛衰記』における概略を次にまとめた。

横笛は斎藤滝口時頼と恋仲であったが、滝口は父の反対と横笛への恋慕との間で葛藤し、出家してしまう。滝口が嵯峨の法輪寺に居ることを知った横笛は「人コソ心ツヨク共尋テ恨ント思ケレハ」と、内裏を抜け出して滝口の僧坊を訪ねるも、滝口は人違いだとして横笛に決して会おうとしなかった。帰途、横笛は大井川で入水する。滝口は横笛を弔い、高野山へ登る。

では、何故巻四の一は前半部で横笛に言及するのか。この問題については、同じく前半部に登場する役人の妻との関係に注目してみたい。横笛と役人の妻―この二人の女性は、愛する相手への恨み、我が身を省みず相手を追う執心深さ、川辺での死という共通点を持つ。役人の妻の行動には『源平盛衰記』の横笛の面影が見られるのである。

瀧口横笛説話の利用は巻四の一前半部だけではなく、後半部にも見られる。後半部では狂乱した娘を癒やすために梓神子が母親の霊の口寄せを行う。この場面で梓神子が登場する点については、先行研究による付合語の指摘がなされているが、[14]ここで注目されるのは出家した滝口と横笛による贈答歌にいずれも「梓弓」が詠み込まれていることである。[15]滝口と横笛は出家後、一度も対面が叶わなかった。この「梓弓」の贈答歌の場面は二人に出来た唯一の交流として描かれるのである。これは、巻四の一における母親を慕う娘と母親の霊との交流において、梓弓を弾く神子が仲介を果たしたことに利用されているのである。ただし、『源平盛衰記』には「梓弓」の和歌は登場しない。だが、『平家物語』や当時享受されていた滝口横笛説話を扱った謡曲や御伽草子、仮名草子等[16]には「梓弓」の贈答歌が二人の交流の場面において描かれている。横笛から「梓弓」の和歌を連想することは、当時の読者にとっては可能であっただろう。

ここまでは前半部を中心として、巻四の一における滝口横笛説話の利用について論じてきたが、続いては後半部に目を向けてみたい。後半部では母親を慕うあまりに狂乱した娘のために、梓神子による口寄せを用いての母親の霊との再会が行われる。この《親子》、《狂乱する女》、《霊との再会》という要素から、想起される先行文学作品がある。それは、謡曲「角田川」である。梗概を以下に挙げる。

人買いにさらわれた息子梅若丸を尋ね、母親は物狂いになりながら東国へ向かう。三月十五日、角田川に辿り着き、渡し船に乗ると、対岸の塚で法要が行われており、それが梅若丸の一周忌の法要であると船頭から告げられる。船頭に勧められ、塚で念仏をすると、梅若丸が現れ言葉を交わすが、すぐに姿を消してしまう。

巻四の一には前半部にも《渡し船》《岸の柳》と、謡曲「角田川」を連想させる単語が用いられている。このように、巻四の一に利用されている滝口横笛説話と謡曲「角田川」はいずれも愛する者に対する執心が深い女性の物語であることが注目される。では、何故巻四の一はこのような先行文学作品を読者に想起させる仕掛けがなされているのだろうか。

ここで改めて母親の霊の口寄せの特徴について考察してみたい。まず、「見ぬよの母にあふ心ちして、袖は涙に耳をすませ」ていた娘や、「座中」の人々が期待していた母親との再会とはどのようなものだったのか。それは、謡曲「角田川」や横笛滝口説話のように、美しくももの悲しい交流であったと思われる。巻四の一をここまで読み進めた読者も同様の展開を予想するはずである。ここで、元禄のごく初年頃に上演されたとされる古浄瑠璃『角田川』[17]の例を紹介しておきたい。次に引用するのは、梅若丸の追善供養が行われる場面である。

母上は（中略）あとをしたひてあはんとはとかく時節を松若を、見るにつけてはしにたくもなき。梅若こそ恋しけれ」となげかせ給ふそ道理なる。

されども松若おとなしやかに、「御くやみしごくせり去ながら、もはや返らぬ道なればおヲそれながら某を、兄上とおぼしめされ御なぐさみおはしませ。いかに俊兼。いざ先御ついぜんのいとなみ何とぞ」と宣へば、「其段は御心やすくおぼしめせ」と。すなはち妙義山北法寺の源流上人を頼つゝ、隅田川のほとりにて御弔とぞ聞えける。

去程に、源流上人は寺僧残らず召つれられ、河原に出させ給ひ松若親子俊兼にもよきに弔ひ給ひつゝ、扨梅若の御はかのうへに出離生死の高そとは、しきみにをけるあかの露、玉のかずある法のこゑ、しんゐをすます計なり。

既に法事もおはる比、梅若丸の亡魂そとはのかげにあらはれて、「あらたつとの御弔ひやな。則住安楽世界阿弥陀仏。大菩薩衆囲遶住処の文にたがはず、決定往生すべき身の母のしうぢやくふかきゆへ、りんゑの雲霧おほひかさなりもとの中有に立返り、アゝかなしやよるとなく、ひると涙のふちに

しづみ、うかみえがたく候へばこひしゆかしと思召、御歎をひるがへしぼだいしんをおこされ、我あととひて給はれ」と涙にくれて立給ふ。

古浄瑠璃『角田川』では追善供養の途中で梅若丸の亡魂が現れ、母親の執着のために成仏できず苦しみを受けていることを告げる。そして、母親に歎きを止めて供養を行うよう涙ながらに願うのである。これは親子の愛別離苦の悲しみに満ちた再会であり、当時における享受の例として興味深い。

しかし、実際に母親の霊が娘に浴びせた言葉とその態度は全く異なるものであった。まず、その説教の内容については「夫の心にしたがひ」等、極めて女訓的であることが注目される。では、実際の母親はどのような行動をしていたのか確認してみたい。まずは、前半部における母親の死後、次の一文が続けられている。

此妻は、いやしくも嫉妬より其身をうしなひける。女の、胎前に住家を出る事、かりにもなかれ。是ふかくの第一なり。

右では、臨月で舟に乗った末に死亡した母親に対して女訓的な批評がなされている。母親は女訓に反した「ふかく」を犯した人物として扱われているのである。当時、妊婦はどのように行動すべきと考えられていたのか。その一例として、『女四書』（明暦二年〈一六五六〉刊）女孝経巻之下「胎教章 第十六」を次に引用した。

すでに。懐妊してよりは。ねる時に。そば腹にねず、座しておる時に。かたよりおらず。たつ時に、かたあしにて、たゝず。（中略）目には、五色の外の色を、みず。みゝに淫乱なる、みだりがはしきこゑを、きかず。口に、おごりたることを、いはず。手に、よこしまなる物を、もたず。よるは聖賢の書を、よませきゝ。昼は、礼楽の、たゞしきわざをならひ侍るべし。[18]

妊婦は懐妊後の安静が重要とされているが、母親は夫の遊里通いに付いて行く。また、胎教の一環として「目には、五色の外の色を、みず。みゝに淫乱なる、みだりがはしきこゑを、きかず」「よるは聖賢の書を、よませきゝ」とされているのに対し、母親は夜毎に舟に乗って夫と共に遊女の歌舞を見物している。さらに「嫉妬」自体が女訓に反した行為である。つまり、母親は女訓を全く守れていない人物として設定されているのだ。梓神子による口寄せでは、そのような母親が自分の行動を棚に上げ、娘に対して女訓に基づいた説教を行うという構図が取られているのである。さらに、あれほど執心深かった母親が「たまたま仏果を得て、九品の蓮台に座してうき世を忘れし」という境地に至れるのかという疑問を読者に抱かせるだろう。

母親の口寄せの場面は、梓神子が演じる母親の言葉と前半部に登場する生前の母親像との間に大きな差異があり、読者に滑稽さを感じさせる。同時に、先行文芸における中世文学的で悲しくも美しい「あわれ[19]」な場面を受容していた当時の読者にそれらを想起させるも、巻四の一は当世的な説教と荒々しい罵声という「興をさま」す場面に作り替えてしまうという、予想を裏切る意外性

を読者に与えるのである。

おわりに

巻四の一には、瀧口横笛説話や謡曲「角田川」など中世的な執心が見られる作品の要素を配置して、読者にそれらを想起させつつも、その予想を裏切ってしまうという面白さがある。謡曲などに描かれる中世的な執心は「法の力ぞ有難き」[20]など、仏教の功徳によって解消されるものであった。また、恋人や子供への執心によって狂乱する場合は、神仏の導きによって相手と再会する構成をとるものが殆どである。このような宗教的な解決に対して、巻四の一は「才智」を用い、人間の手によって執心を解消するところに、それまでの中世文学的な展開を脱した当世的な新しさと現実性が見られる点に注目すべきである。

さらに、この「物ごとにくふうふかき人」による娘の治療は、まず「「それ程母のなつかしくは、難波の大寺の神子を呼よせて、冥途の事共口よせて聞給へ」といへは、大かたならずよろこび、「有がたきをしへぞ」と、是をねがひける」と娘の関心を誘導させ、梓神子の口寄せにより母親への「しうたん」を「恨み心」に変化させて快復させるものであった。これは他者の心を操作する療法といえるだろう。

人の心の操作に長けていたのは「物ごとにくふうふかき人」だけではない。代官も公務や家の経営において、諸階層の人物が持つ物欲の調整に長けており、「諸事に其難ひとつもな」いという有能な人物であった。しかし、そのような代官も、私生活では遊興に逃避し、ごく身近な存在である妻の執心を解消することは叶わなかった。代官は遊里通いを共にすることで妻への対処が出来たと油断し、妻の執心の深さを把握できずに船上で死なせてしまった。代官は妻の執心への対処に失敗しただけではなく、それによって生じた娘の狂乱をも治せず心理的に消耗し、程なく死亡してしまう。

一方、婿は「此身になるを嫁にまぎれなし」と娘を引き取り、「心良く看病」し続けた。その忍耐と治療法の模索の結果、「内談とりとり」の場に居合わせた「物ごとにくふうふかき人」の手を借りることができた。代官は妻の執心や娘の狂乱という現実から前者は逃避し、後者はそれに堪えきれず死亡するが、婿は娘の狂乱に真摯に向き合い、母親への執心からの解放に成功した。これらの代官と婿の違いは、「武士のわたくしあり」「武家の本意なり」という評価、「此の家絶て」「此家繁昌」と家の盛衰において、対照的に表れている。巻四の一の構成は、執心への対処をめぐる代官の失敗例と、婿と彼に協力した「物ごとにくふうふかき人」の成功例として捉えることが可能である。

西鶴は『新可笑記』序において「人は虚実の入物」と人の心の移り変わりを指摘し、また、『新可笑記』と同年に刊行された『日本永代蔵』においても「其心ッは本虚にして、物に応じて跡なし」と、人の心は外部の影響により変化すると述べている[21]。巻四の一では人為的な方法による心の変化が描かれていることが注

目される。巻四の一は人の心の操作に関心が向けられている章段であるが、同時に人間の欲や執心の制御の難しさをも描き出す。これは、西鶴の人間観を考える上で重要な手がかりとなるだろう。

注

（1）金井寅之助「新可笑記の版下」『西鶴考』八木書店、一九八九年（初出は『ビブリア』二十八号、天理図書館、一九六四年八月）金井氏は書首における章の番号を囲む枠の種類より、各章段の評価を四段階に分類する。

（2）杉本好伸「『新可笑記』ノート―成立過程解明に向けての一階梯として―」『国語国文論集』第三十号、安田女子大学日本文学会国語国文論集編集室、二〇〇〇年一月

（3）稿者による口頭発表「『新可笑記』「舟路の難義」における〈隅田川物〉の利用」（日本近世文学会春季大会、二〇一一年六月一一日、於日本大学）を指す。

（4）篠原進「あらすじの外側にある物語―『新可笑記』の表現構造―」『青山語文』第四十三号、青山学院大学日本文学会、二〇一三年三月

（5）篠原進「二つの笑い―『新可笑記』と寓言―」『国語と国文学』第八十五巻第六号、東京大学国語国文学会、至文堂、二〇〇八年六月

（6）西鶴の作品には『武道伝来記』序「筆のはやし、詞の山、心のうみ静に、御松久かたの雲に、よろこひの舞鶴、是を集ぬ。」などの用例が見られる。（以下、傍線は稿者による）

（7）『新可笑記』における武士の油断については、拙稿「『新可笑記』の描く「油断」―巻五の二「見れば正銘にあらず」考」にて論じている。（『近世文藝』第九九号、日本近世文学会、二〇一四年一月発行予定）

（8）前田金五郎「「武道伝来記」の事実と創作」において、巻五の一「枕に残る薬違ひ」に登場する二人の医者の診察結果に、『医学正伝』をはじめ当時の医学書が用いられていることが指摘されている。（日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書 西鶴』有精堂出版、一九六九年〈初出は『文学』岩波書店、一九六六年十月〉）

（9）『医学正伝』の本文は、北里研究所附属東洋医学総合研究所編『医学正伝』（和刻漢籍医書集成 第八輯、エンタプライズ、一九九〇年）収録の元和八年整版本を用いた。読み下しは原則として版本に従い、稿者が適宜句読点と改行を加えた。『医学正伝』は多数の伝本があり、「江戸時代前中期に、わが国後世方派医師の医学典範として最もよく読まれた書の一つである」とされている。（小曽戸洋「『医学正伝』解題」〈前掲書〉）なお、当時広く受容された医学書である曲直瀬道三『啓迪集』（慶安二年刊）巻五「狂癲門 附癇証」にも「移情之法」と題して、同じ内容の治療法が掲載されている。『啓迪集』は『医学正伝』をはじめ、多数の医学書からの引用がなされた書であるため、この「移情之法」は『医学正伝』に拠るものと思われる。

（10）引用本文は、朝倉治彦編『仮名草子集成 第五巻』（東京堂出版、一九八四年）を用いた。

（11）冨士昭雄・広嶋進校注訳、新編日本古典文学全集69『井原西鶴集④』、小学館、二〇〇〇年

（12）「院政時代までは隆盛を極めていた江口・神崎は、源平時代ごろから衰え始め、鎌倉時代に入ってからは衰微の一途を辿り、南北朝時代に至って全くその影を没するに至ったようである。」（滝川政次郎『江口・神崎』第七章「江口・神崎の盛衰」至文堂、一九六五年）

(13) 『源平盛衰記』本文は慶長古活字版を用いた。巻四の一と対応する箇所は以下の通りである。「高倉院御位ノ時建礼門院ノ后宮ニテ渡ラセ給ケルニ二人ノ半物有。横笛刈萱トソ云ケル共ニミメ形類ナク心ノ色七情アリ刈萱ヲハ越中前司盛俊相具シケリ横笛ト云ハ本ハ神崎ノ遊君長者ノ女也大方モ無双ノ能者今様朗詠ハ所ノ風俗ナレハ云ニ及ハス琴琵琶ノ上手歌道ノ方ニモ勝レタリ」（渥美かをる『源平盛衰記 第五冊』、勉誠社、一九八八年）

(14) 広嶋進氏によって「序文でいう「虚言」の付け合い語に、「傾城」と「梓御子」がある（類船集）。「正直」で非の打ちどころのない代官が、「誠」のない遊女のもてあそびに夢中になった。そのために、妻の嫉妬や死、娘の狂気が引き起こされる。しかし「梓御子」の嘘によって、やっと娘が正気の世界に戻る。」という指摘がなされている。（『井原西鶴集④』頭注〈前掲〉）

(15) 例えば『平家物語』巻十（延宝五年刊本）では「そる迄は恨しか共あづさ弓まことの道に入ぞうれしき」「そるとても何か恨みん梓弓引とゞむへき心ならねば」とある。その他の滝口横笛説話にも和歌に異同が見られる場合もあるが、梓弓の贈答歌の場面は存在するものが多い。

(16) 瀧口と横笛を描いた先行文芸として、『平家物語』巻十、『横笛物語』、御伽草子『横笛草紙』、謡曲『横笛』、『よこふへたきぐちそうし』（元和七年古活字本甲乙二種）、『よこぶえたきぐちのさうし』（明暦四年刊）などが挙げられる。

(17) 『角田川』の上演年については、信多純一「宇治加賀掾年譜」（横山重編『加賀掾段物集』古典文庫、一九五八年）を参照した。『角田川』の本文は、古浄瑠璃正本集刊行会編『古浄瑠璃正本集加賀掾編 第四』（大学堂書店、一九九二年）より引用した。元禄元年十一月刊とされる『新可笑記』との先後関係は不明であるものの、本文に引用した箇所に展開の共通点が見られることが注目される。

(18) 引用本文は、朝倉治彦編『仮名草子集成 第四十巻』（東京堂出版、二〇〇六年）を用いた。

(19) 謡曲「角田川」における母親と梅若丸の再会場面は「我が子と見えしは塚の上の、草茫々としてただ、しるしばかりの浅茅が原と、なるこそあはれ成けれ、なるこそあはれ成けれ。」と描かれる。（本文は西野春雄校注、新日本古典文学大系57『謡曲百番』〈岩波書店、一九九八年〉より引用した。）

(20) 謡曲「百万」より引用。（『謡曲百番』〈前掲〉）

(21) 『日本永代蔵』巻一の一「初午は乗てくる仕合」（貞享五年〈一六八八〉正月刊）冒頭に「天道言ずして、国土に恵みふかし。人は実あつて、偽りおほし。其心ゝは本虚にして、物に応じて跡なし。是、善悪の中に立て、すぐなる今の御ゝ代をゆたかにわたるは、人の人たるがゆへに、常の人にはあらず。」とある。傍線部は当時広く受容された『古文真宝後集』所収の程正淑「視箴」の「心兮本虚、応物無迹」に拠っている。

※『新可笑記』をはじめとする西鶴浮世草子作品の本文は『新編西鶴全集 本文篇』（第二・三巻、勉誠出版、二〇〇二・二〇〇三年）より引用し、会話文には稿者が適宜鉤括弧を補った。

〔付記〕

本稿は平成二十三年度日本近世文学会春季大会（於・日本大学）における口頭発表に基づくものです。席上でご教示を賜った冨士昭雄先生、福田安典先生をはじめとする先生方、そして多くのご教授を賜った廣瀬千紗子先生に御礼申し上げます。

（なか・さおり　本学大学院博士後期課程）